頭註 引歌類聚抄

文學士 荒瀨邦介

昭和六年八月廿日印刷
昭和六年八月廿五日發行

編者　荒瀨邦介

發行兼印刷者　京都市上京區烏丸今出川上ル　平野愼之助

印刷所　京都市上京區烏丸今出川岡松町　平野書店出版部

發行所　京都市烏丸通今出川上ル　平野書店
振替口座大阪七四八七八番

凡例

和歌に關する抄本は種々出版せられて居りますが、それらは大概歌集中の秀歌を選出したものでありまして、かうした抄本を高等學校や諸專門學校程度の教科用書として使用する事も至極結構であると思ひますが、私はわが國文の生立の上から考へまして、古人が作歌作文上殊に親しみを持つて居た和歌のみを抄出したものを、いろ〳〵の國文學書を繙く豫備智識として授けるといふ事も必要ではないかと考へ、尚且つ秀歌のみを授ける事が和歌教授の全目的でない以上、玉石混淆せるものを教材として取扱ふといふ事も有意義であると信じまして、本書を世に公にした次第であります。本書は古今和歌集から新古今和歌集に至る所謂八代集中から材料を蒐集し、教科用に纒めたものであります。配列の方法は古今和歌集の序を劈頭に掲げ、同集の分類法に從つて四季等に分類し、尚同集に不足せる項目は他の集より加へ、勅撰順に各項毎に纒め、略注を頭記して讀者の便に供へました。幸に私と同感の方がありまして、本書が多少なりとも學界に益するところがありますれば大に欣幸と存じます次第で御座います。

昭和六年五月　　著者識す

目次

古今和歌集序……一
春の歌
古今集……二
後撰集……三四
拾遺集……三六
後拾遺集……三九
詞花集……四〇
千載集……四一
新古今集……四三
夏の歌
古今集……四七
後撰集……五〇
拾遺集……五一
後拾遺集……五三
金葉集……五四
千載集……五五
新古今集……五五
秋の歌
古今集……五九
後撰集……七三
拾遺集……七三
後拾遺集……七六
詞花集……七八
千載集……七八
新古今集……七九
冬の歌
古今集……八三
後撰集……八五
拾遺集……八五
後拾遺集……八七
金葉集……八七
千載集……八八
新古今集……八九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

賀の歌

古今集……九二
後撰集……九四
拾遺集……九四
後拾遺集……九五
詞花集……九五
新古今集……九六

離別の歌

古今集……九七
後撰集……九九
拾遺集……一〇〇
後拾遺集……一〇〇
千載集……一〇〇
……一〇一

[illegible]

古今集……一〇二
後撰集……一〇五
後拾遺集……一〇六
新古今集……一〇六

物名の歌

古今集……一一〇
千載集……一一〇

戀の歌

古今集……一一一
後撰集……一三八
拾遺集……一四五
後拾遺集……一五五
金葉集……一五九
詞花集……一六一
千載集……一六三
新古今集……一六五

哀傷の歌

古今集……一七四
後撰集……一七七
拾遺集……一七七
後拾遺集……一八〇
新古今集……一八一

雜の歌
古今集……一八二
後撰集……二〇一
拾遺集……二〇五
後拾遺集……二二三
金葉集……二二七
詞花集……二二九
千載集……二二九
新古今集……二三一
神祇の歌
後拾遺集……二三七
新古今集……二三七
釋教の歌
後拾遺集……二三九
千載集……二三九
新古今集……二三〇
雜體の歌
旋頭歌
古今集……二三一
拾遺集……二三一
千載集……二三二
誹諧歌
古今集……二三二
後拾遺集……二三六
連歌
金葉集……二三六
大歌所御歌
古今集……二三七
東歌
古今集……二三九
（以上）

頭註 引歌類聚抄

文學士　荒瀬邦介著

この序は貞應本により、左註を存せしめたり。

○やまとうた―和歌。漢詩に對する語。
○ことのは―詞。種の緣語。
○ことわざ―事業。
○心に思ふこと―心中の感じ、喜怒哀樂の情。
○めに見えぬ云々―「動二天地一、感二鬼神一、莫レ近二於詩一。」（毛詩序）眞名の序には「動二天地一、感二鬼神一、化二人倫一、和二夫婦一、莫レ宜二於和歌一。」とあり。

古今和歌集序

やまとうたはひとの心を種として、よろづのことのはとぞなれりける。世の中にある人ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけていひ出せるなり。花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるものいづれか歌をよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬおに神をもあはれとおもはせ、をとこをんなの中をもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるは

歌なり。この歌あめつちひらけはじまりけるときよりいできにけり。

あまのうきはしのしたにてめがみをがみとなり給へる事をいへるうたなり。

しかあれども世につたはることは、久方のあめにしては、したてるひめにはじまり、

したてるひめとはあめわかみこのめなり。せうとの神のかたちをかたにうつりて、かがやくをよめるえびすうたなるべし。これらはもじのかずもさだまらず、うたのやうにもあらぬことどもなり。

あらがねのつちにしては、すさのをのみことよりぞおこりける。ちばやぶる神代には、歌のもじもさだまらず、すなほにして、ことのこゝろわきがた

○久方の―「あめ」の枕詞。

かゞやくをよめる―「あめなるや〳〵おとたなばたのうながせる玉のみすまる、みすまるのあたまはや、みたにふたわたらす、あぢすき高彦根の神ぞや」をさす。

○あらがねの―「つち」の枕詞。

○人の世云々―香川景樹は「すさのをのみことよりぞ」の句を削りて神武以後の人間世界とすべしといひ、富樫廣蔭はこの一節を全然削除すべしといへり。

○とほきところも云々――「千里始二足下一、高山起二微塵一、吾道亦如レ此、行レ之貴二日新一。」（白樂天座右の銘）

○おひのぼれる――成長するをいふ。

かりけらし。　人の世となりて、すさのをのみことよりぞみそもじあまりひともじはよみける。

すさのをのみことはあまてるおほん神のこのかみなり。女とすみ給はんとて、いづものくにゝ宮つくり給ふ時に、その所にやいろの雲のたつを見てよみ給へるなり。やくもたついづもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきを

かくてぞ、花をめで、とりをうらやみ、かすみをあはれび、露をかなしぶ心ことば、おほくさまぐゝになりにける。　とほきところもいでたつあしもとよりはじまりてとし月をわたり、たかきやまもふもとのちりひぢより成りてあま雲たなびくまでおひのぼれるがごとくに、世のうたもかくのごとく

○なにはづの歌―「難波津にさくやこの花冬ごもりいまを春べとさくやこの花」

○あさかやまのことば――あさか山かげさへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふものかは。萬葉集卷十六に出で、詞書に「於是有前采女風流娘子、左手捧鏡、右手持水、擊之王膝而詠其歌」とあり。―たはぶれより」と本文にあるは、采女のわざとなまめきぎれながら「詠みしをいへるなり。

なるべし。なにはづのうたはみかどのおほんはじめなり。

おほさゝぎのみかどの、なにはづにてみことときこえけるとき、東宮をたがひにゆづりて、くらゐにつきたまはで、みとせになりにければ、王仁といふ人の、いぶかりおもひて、よみたてまつりけるうたなり。この花は梅の花をいふなるべし。

あさかやまのことばは、うねめのたはぶれよりよみて、

かつらぎのおほぎみを、みちのおくへつかはしたりけるに、國のつかさことおろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、うねめなりける女の、かはらけとりてよめるなり。これにぞおほきみの心とけにけり。

このふたうたは、歌のちゝはゝのやうにてぞ、てな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

○むくさ―六種類、○そへ歌―風。○「おほさゝぎ」以下は左註と見るべきか。

○かぞへうた―賦。

○「さく花に」以下は左註と見るべきか。「さく花に」の歌拾遺集巻八に見ゆ。

らふ人のはじめにもしける。

そも〳〵歌のさまむつなり。からのうたにもかくぞあるべき。そのむくさのひとつには、そへうた、おほささぎのみかどをそへたてまつれるうた、

なにはづにさくやこの花冬ごもりいまははるべとさくやこのはな

といへるなるべし。ふたつにはかぞへうた、

さく花におもひつくみのあぢきなさ身にいたづきのいるもしらずて

といへるなるべし。

これはたゞごとにいひて、ものにたとへなどもせぬものなり。此のうたいかにいへるにかあらん、其の心えがたし。いつゝにたゞごとうたといへるなんこれには

○なづらへうた―比。

○「君に云々」は左註と見るべきか。

○たとへうた―興。

○「わがこひは」以下左註と見るべきか。―よむ」は數ふる意。

かなふべき。

みつにはなづらへうた

君にけさあしたの霜のおきていなばこひしきごとにきえやわたらん。

といへるなるべし。

これは物にもなづらへて、それがやうになんあるとやうにいふなり。此のうたよくかなへりともみえず。たちちねのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるかいもにあはずて。かやうなるやこれにはかなふべからん。

よつにはたとへうた

わがこひはよむともつきじありそ海の濱のまさごはよみつくすとも

○たゞごとうた―雅。

○「いつはりの云々」は左註と見るべきか。この歌古今集巻十八に見ゆ。

といへるなるべし。

これはよろづの草木とりけだ物につけて、心を見するなり。この歌はかくれたる所なんなき。されど初のそへうたとおなじやうなれば、すこしさまをかへたるなるべし。すまのあまのしほやくけぶり風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり。此のうたなどやかなふべからん。

いつゝにはたゞごとうた

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

といへるなるべし。

これはことのとゝのほりたゞしきをいふなり。此の歌の心さらにかなはず。とめうたとやいふべからん。山ざくらあくまでいろを見つるかなはなちるべくも風ふ

○いはひうた―頌。

○さき草―幸草（サキクサ）の義。三巻の草を瑞祥とする故事によるといふ。又、山百合に似て一茎三枝に分れたる草の名。「このとのは云々」は左註と見るべきか。歌は催馬樂歌なり。

○いろにつき―輕佻に流るゝをいふ。○花になり―浮華に傾くをいふ。

かぬよに。

むつにはいはひうた

このとのはむべもとみけりさき草のみつばよつばにとのづくりせり

といへるなるべし。

これは世をほめて神につぐるなり。此の歌いはひうたとは見えずなんある。かすが野にわかなつみつゝよろづよをいはふこゝろは神ぞしるらん。これらやすこしかなふべからん。おほよそむくさにわかれんことは、えあるまじきことになん。

いまの世の中いろにつき、人の心花になりにけるより、あだなる歌、はかなきことのみいでくれば、色ごのみのいへにむもれ木の人しれぬことゝなり

○まめなる所―眞面目な場所。公然の場所。○花すゝき云々―薄の花となりしものにて穂に出すの序。○ほにいだす―公然とあらはす意。

○さゞれ石云々―「わが君は千代にましませさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで」〈古今集賀〉○つくば山に云々―「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにまさるかげはなし」〈同上東歌〉○ふじのけぶりに云々―「人知れぬおもひをつねにする富士のけぶりの山こそわが身なりけり」〈同上戀〉○まつむしの云々―「君しのまず草にやつるゝふるさとはまつむしの音ぞ戀しかりける」〈同上秋〉○たかさご―高砂。播磨國。

て、まめなる所には、花すゝきほに出すべき事にもあらずなりにたり。そのはじめを思へば、かゝるべくなんあらぬ。いにしへのよゝのみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々をめして、ことにつけつゝうたをたてまつらしめ給ふ。

あるは花をそふとて、たよりなきところにまどひ、あるは月を思ふとて、しるべなきなみにたどれる心々を見給ひて、さかしおろかなりとしろしめしけん。しかあるのみにあらず、さゞれ石にたとへ、つくば山にかけて君をねがひ、よろこび身にすぎ、たのしみ心にあまり、ふじのけぶりによそへて人をこひ、まつむしのねに友をしのび、たかさごすゝ

みの江の松もあひおひのやうにおぼえ、をとこ山のむかしを思ひ出で、をみなへしのひとゝきをくねるにもうたをいひてぞなぐさめける。　又春のあしたに、花のちるを見、秋の夕暮に木の葉のおつるをきゝ、あるはとしごとにかゞみのかげに見ゆる雪と波とをなげき、草の露・水の泡を見てわが身をおどろき、あるはきのふは榮えおごりて時をうしなひ、世にわび、したしかりしもうとくなり、あるは松山の波をかけ、野中の水をくみ、秋はぎのした葉をながめ、あかつきのしぎのはねがきをかぞへ、あるはくれ竹のうきふし人にいひ、よしの河をひきて世の中をうらみきつるに、いまはふじのやま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook